

「道の駅」を創る

石田 樹



「道の駅」とは、地域の創意工夫により道路利用者に快適な休憩と多様で質の高いサービスを提供する施設であり、国土交通省の「道の駅登録要綱」では、次に掲げるサービス等を備えていることとされている。

- ・十分な容量の駐車場と清潔なトイレ(24h無料)
- ・道路及び地域に関する情報を提供する案内所
- ・授乳やおむつ交換が可能なベビーコーナー
- ・女性・年少者・高齢者・身障者・妊婦や乳幼児連れ等様々な人の使いやすさに配慮されていること
- ・施設計画は景観に十分配慮し、地域の優れた景観を損なうことのないよう計画されていること

平成5年に103駅で始まった「道の駅」は、令和4年2月現在で全国に1,194駅が登録されており、いまや上述した沿道休憩施設としてのサービスだけでなく、防災・観光・地域振興・交通等の多様な機能が期待されている。そのため、設置する自治体には、多様化するニーズに的確に対応した「道の駅」を創り上げる手腕が求められ、その難易度は一層高まっていると言える。

そのような中、「道の駅」の整備や運営にあたって、必要な議論や地域との連携が適時適切に行われなかったり、施設の魅力や機能への配慮が不十分であったりして、期待された整備効果が上がらずに苦慮している自治体も少なからずみられる。上述した多様化するニーズに応え、機能を発揮させるためには、計画・設計・運営に必要な技術を開発し、体系化する必要がある。

そこで、当研究所の地域景観チームでは「道の駅」に携わる実務者の支援に向けた研究開発に取り組み、構想から計画・設計に至る検討プロセスの具体化、コンセプトの設定手法、施設の配置設計手法、整備効果の評価手法等の実践的技術を取りまとめた。

国内外の沿道休憩施設の設計事例および「道の駅」利用者・地域ニーズの調査を行った結果、「道の駅」の魅力と機能を高めるためには、土木・造園・建築の要素が一体的に計画・設計されていることが必須であることが確認できた。そこで、「道の駅」の建物・園地・

駐車場等の施設の配置や、ベンチ・植栽等の付属的要素が利用者の評価に与える影響を印象評価実験等で把握し、魅力と機能を高める施設配置の手法を明らかにした。また、駐車場の利用実態調査から安全で快適な駐車マスの大きさや全体のレイアウトを提案した。

「道の駅」整備によって発現する社会・経済的効果を予測することは、コンセプトや運営手法を検討する上で極めて重要である。そこで、事例調査等から「道の駅」や利用者への直接効果だけでなく、地域全体への波及効果も含む整備効果モデルを作成し、さらにこのモデルを元にして整備効果を自己診断する手法を構築した。

これらの研究成果により、自治体担当者や計画・設計担当の技術者は、これまでより簡易に「道の駅」を分析・評価し、計画・設計・運営に取り組むことが可能となった。成果は技術資料にとりまとめ、地域景観チームのWEBサイトで公開しているので、「道の駅」に携わる多くの方々にぜひ活用していただきたい。

一方、日本の「道の駅」は海外でも注目されており、道路利用者を取り込んだ地域振興施策として効果が期待されている。地域景観チームでは、JICA北海道センターが2017年から実施している“中米・カリブ諸国向け道の駅による道路沿線地域開発研修”において、研修カリキュラムの作成や講師派遣、現地指導等を通じた技術支援を行ってきた。こうした取り組みが実を結び、中米諸国では「道の駅」をモデルとした沿道施設の設置事例が増加している。

国土交通省施策「道の駅」第3ステージ(2020-25)では、“「道の駅」同士や民間企業、道路関係団体等との連携を面的に広げることにより新たな魅力を持つ地域づくりに貢献する”としている。今後は「道の駅」の目的と置かれている状況を踏まえた多様な主体の連携のあり方と、連携の構築手法についての研究に取り組み、よりよい「道の駅」創りに貢献していきたい。